

『今月の天候と農作業』

通巻第5556号
6月号
平成25年 5月 31日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 6月 1日(土)～ 6月 7日(金)

天気は、前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間の前半に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<2週目の予報> 6月 8日(土)～ 6月 14日(金)

天気は、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は、2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<3週目から4週目の予報> 6月 15日(土)～ 6月 28日(金)

天気は、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

6月は気温や湿度が高くなり病害虫も発生しやすくなります。今月下旬より出穂が始まりますので、生育状況を十分把握し適期作業を行いましょう。

1 追肥

コシヒカリは倒伏しやすいので、出穂20日前頃の幼穂が1匁くらいに伸びたのを確認し、葉色の濃淡を観て適量を追肥します。倒伏に強い新品種「夏の笑み(宮崎45号)」は、コシヒカリより出穂が7日程遅くなります。なお、田植え時に一発肥料を施用している場合は追肥の必要はありません。

2 病害虫対策

穂いもちは、収量・品質を低下させる重要病害です。穂ばらみ末期と穂ぞろい期に防除を行いましょう。

早期水稲ではカメムシによる斑点米で、等級格落ちが多く発生しています。カメムシは畦畔や水田周辺のイネ科雑草で繁殖するため、地域ぐるみで一斉に除草し、密度を低下させることも有効です。

なお、除草は出穂直前に行うと、逆にカメムシを水田内に追い立てることになるため、遅くとも出穂の2週間以上前までに行います。水田内のヒエやホタルイ等もカメムシの発生源になりますので、早めに処分しましょう。薬剤防除は穂揃い期と、その7～10日後となります。防除は周辺の作物に農薬を飛散させないように十分注意しましょう。

3 水管理

幼穂形成期から穂ばらみ期まで間断かん水を行い、根の健全化に努めます。穂ばらみ期から出穂開花期は、イネの生育も旺盛で水を最も必要としますので確保しましょう。

◆ 普通期水稲

1 育苗

普通期水稲は高温多湿で苗いもちが発生しやすいので、発生を確認したら直ちに防除します。

2 田植え準備

荒代・植代時の水面に見られる浮遊ゴミには、紋枯病等の菌核も混じっ

ており感染源となります。風でゴミが吹き寄せられた時は、かき出し処分しましょう。植代は田面に高低があると、低い所はタニシの食害を受けやすくなり、高い所は田面が露出し除草剤の効果が低下しますので、できるだけ均平にします。

3 田植え

「ヒノヒカリ」は、早植すると出穂が早くなり、高温登熟障害による白未熟粒が発生し品質が低下しますので、6月20日以降に移植します。

田植えの際は「いもち病」、「ウンカ類」の予防のために箱施薬を行います。田植え後の余り苗はいもち病の発生源になりますので補植が終わったら直ちに処分します。

4 水管理

移植直後から活着までは、植え傷みを少なくするため、5㍍のやや深水にして稲を守ります。活着したら3㍍程度の浅水にします。

5 除草

除草剤には、ノビエの葉期で処理晩限が表記されています。ノビエの葉期は水田内に発生しているノビエの最高葉齢で判断します。ノビエの葉齢の展開日数の目安は、一葉期が移植後5日目、二葉期が8日目となります。

投げ込み型のパック剤やフロアブル剤は、処理時の水深が浅いと拡散が不十分となり薬害の心配もありますので水深5㍍は確保します。

除草剤散布後は7日間は掛け流しせず止水します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱土壌消毒（消毒法の欄を参照）を行いましょう。

本県のきゅうり栽培において、スリップスが媒介するウイルスによる被害及びトマト栽培においてコナジラミが媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

これらのウイルス病に一旦感染すると、回復は難しく草勢の低下等により収量は大幅に低下します。ウイルスの媒介は昆虫であり、ハウス内に生息するウイルス保毒昆虫をハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し

繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ちだす前に、ハウス内の蒸し込みを10日間程度行い、ハウス外への飛散を防ぎましょう。

◆ 夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行いましょ

- ① 通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行います。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水します。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果をおこないます。
- ③ 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意します。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図ります。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風採光を良くします。
- ⑤ 換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くします。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ 共通（排水対策）

梅雨期を迎えます。畦や作物が冠水すると、根傷みによる生育不良や病気発生の原因となりますので、水田に作付けされているものは排水対策を徹底しましょう。

◆ 食用かんしょ

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し掘りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

◆ おくら

収穫期です。草勢が低下すると葉の切れ込みが深くなりますので、追肥や摘葉については草勢を見つつ行いましょう。

◆ らっきょう

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多いときに収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。自家採種をする場合は、生育不良株を抜き取り、ネダニの防除を徹底し球が完全に肥大充実してから堀上げ、陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

◆ さといも

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し堀りを行って重量を計り、10^{kg}の換算収量が1トに達したら収穫を始めましょう。

◆ ほうれんそう

高冷地栽培では、順次、収穫、播種となり、4月に播種したものは、上旬より収穫期を迎えますが、収穫時に緑が濃くて葉肉の厚い状態にするため、収穫予定の7～10日前からかん水を控えます。収穫後は直ちに次作の準備に取りかかり中旬には播種しますが、降雨も多くなり、べと病の発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用しハウス内の通風を良くしましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の着花量は、樹や地域によりばらつきが見られ、全体としてはある程度の着花が見られ、5月の安定した天候により生理落果が少ない樹が見られます。結果数の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。

品質向上のためのマルチ被覆は遅くとも6月上旬には済ませましょう。

◆ かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300^{mm}の降雨があると薬剤の効果がなくなります。250^{mm}程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行

い、密度を減らすようにしましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、4月の低温のために新梢生育にばらつきが見られる園が見られ、結果しにくい状況が懸念されます。特に温度の低い中山間地域では、結果が不安定なため、出蕾から開花期までの加温により、1番果の結果を促進しましょう。6月10日頃から5～7日間、昼温を30℃、夜温23℃で発芽を揃え、その後は開花まで、昼温25℃、夜温23℃管理することで、良質の花を確保しましょう。

また、満開期のビニール被覆は、降雨による花粉の破裂を防ぎ、結果促進に効果があります。ぜひ実施しましょう。一番花開花以降は高温による結果不良が出ますので、外気温や結実状況を見ながら早めに除去しましょう。

◆ マンゴー

日焼けや高温防止のための過度の遮光は、着色不良や糖度の低下を招きます。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょう。

収穫前から収穫期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった施設では、来年に向けた剪定等の作業に入りましょう。出荷時期が年々遅れ、枝を早く充実させたい園では、間伐による日射の確保、葉面散布の実施、発根促進剤の利用、早めの枝の整理などを行いましょ。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、思い切って改植を行いましょ。

樹冠の縮小を目的とした強度の剪定は翌年の花芽の着生を悪くするので、決して行わないようにしましょう。

剪定残さは、病気の発生原因となります。全て園外に持ち出して処分しましょう。

2 落葉果樹

◆ ウメ・モモ・スモモ

収穫が済んだら礼肥として、年間施肥量の3割程度を施用しましょう。

◆ くり

夏肥の施用を必ず行いましょ。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。肥効をよくするために除草も行いましょ。

(山口 和典)

花き

1 夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を図るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施して下さい。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。系統や気象条件により節間の伸長具合が変わりますので、系統の特性と気象条件を勘案しながら適切なジベレリンの処理を行いましょう。

「精の一世」は6月10日前後が8月盆出荷の消灯日になります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れますので、夜間はシェードを開放し、昼温も換気を十分に行いましょう。

2 秋ギク

秋ギク電照の親株床の施肥量は、窒素過多による穂の発根不良や冷蔵中の腐敗を避けるために、窒素成分で1000㎡あたり10kg程度に留めて下さい。また、親株ほ場での病害発生は採穂本数の減少だけではなく、本ほへの病気の持ち込みにつながりますので、定期的な予防散布を必ず行って下さい。梅雨期間は排水対策を実施しましょう。

3 デルフィニウム

播種及び鉢上げ期になります。288穴セル成型トレイで育苗している場合の鉢上げ適期は本葉2枚展開時です。夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、鉢上げ後から16時間、10℃の夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水管理を実施して下さい。高温、多湿の育苗期間中は、特にチビクロバネキノコバエによる被害が懸念されますので、定期防除に努めて下さい。

4 ホオズキ

7月盆出荷を目標とした雨除け栽培では、6月中旬には着色のためのホルモン処理を行います。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は寒冷紗により遮光して下さい。

また、作り置きをしたホルモン剤は成分が分解し、着色効果が低下する

ので、散布液は必ず散布直前に調整して下さい。ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなりますので、ホルモン剤散布時期より前にアザミウマ類・ダニ類・アブラムシ類並びにうどんこ病の防除を徹底して下さい。高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

5 シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

また、シキミは特に湿害を受けやすい作物ですので、梅雨時期の排水対策を徹底して下さい。

(中村 広)

畜産

1 家畜

梅雨入りし、気温・湿度とも上がり、下痢等の疾病が多くみられる時期になります。畜舎への通風の妨げになるような資材の整理を行い、風の通り道を確認しましょう。また、畜舎カーテンの上げ下げにより、畜舎内への雨の降り込みを防ぎましょう。

乳牛に関しては、本格的に暑熱ストレスを受ける時期になります。牛舎内のヒートストレスメーターの温湿度指数が6.7以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかりと行いましょう。また、牛がいつでも新鮮な水を飲めるようにして下さい。

子牛の下痢対策では、石灰による牛舎消毒と敷料のこまめな交換が効果的です。下痢が発生している子牛に接触した場合は、他の子牛へ下痢が蔓延しないよう隔離するとともに、人を介して移らないよう、長靴や衣服、手指の消毒を心がけましょう。

ロールサイレージを給与する場合、フィルムを外したところから腐敗が始まります。ロールは開封したらできるだけ早く使い切るようにします。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合は腐敗している可能性が高いので、給与しないようにして下さい。乾草や配合飼料の保管については、直接地面に置かずパレットなどを敷いてその上に置き、風通しの良いところで腐敗やカビの発生防止に努めます。飼槽や水槽にもカビが発生しやすいので、こまめな清掃を心がけましょう。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックが必要です。

2 飼料作物

長雨による排水不良は、湿害などにより飼料トウモロコシなど作物の生育を阻害します。ほ場周辺に排水溝を設置し、ほ場内に水が貯まりにくいようにします。冠水した場合は、生育不良となるので水が引いた後、10㎡あたり窒素成分で1kg程度の追肥を行きましょう。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

今年は、一番茶の摘採後に気温が低めに経過したことから、一番茶摘採から二番茶摘採までの期間が長くなると予想されますので、二番茶芽の生育に注意しながら摘採時期を決定しましょう。また、二番茶の摘採時期は降雨が多く、摘採が集中しやすいことから、降雨の影響も考慮し、摘み遅れのないように摘採計画を立ててください。

樹勢の強い茶園では、摘採前に5～7日間程度、黒寒冷紗等で被覆し品質向上を図りますが、被覆に伴う黒葉腐れ病や、葉擦れ、葉焼け等の発生は、逆に品質低下を招くため注意が必要です。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の5～7日後に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。

深刈り更新は、二番茶後できるだけ早く、古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切りの55～60日後に中切り面より3割程度高い位置で一回目の整枝を実施します。

施肥は、二番茶摘採前後に地区の施肥基準に準じて速効性肥料を施用します。

3 幼木園の管理

定植当年から二年生までの幼木園では、台風の被害を回避するためにソルゴーの間作が有効です。また、5月に整枝していない二年生園では、7

月末までに前回より5ㇰ程度上げて整枝します。

茶の根は湿害に弱いため、茶園内の排水にも注意してください。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、裸地伏込みの場合は、笠木の厚さが30ㇰ以上になるよう補充したり、西日が当たる部分の笠木の張り出しを長くする必要があります。林内伏込みの場合は、周囲の下刈や枝払い、除間伐等を行い風通しを良くするとともに、庇陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

また、人工ほだ場の場合は、高温になりやすいので庇陰に十分注意しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。品質の良い乾葉に仕上げる様、適熟葉収穫に努めましょう。また、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保に努めましょう。

1 収穫は、各ほ地のたばこの熟度を見極めて行いましょう。特に3回期以降の横搔きは、じっくり待ち、葉先が枯れ中骨の白化を確認して収穫しましょう。また、立枯病などの病害葉はグジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。

2 梅雨入り前には、ほ地の排水対策や環境整備に心懸け、耕種的病害防除を徹底しましょう。農薬を使用した際には、使用基準を守りましょう。

3 乾葉の取卸し時は、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。乾葉水分は、支骨が折れる程度が目安です。

4 収穫葉にマルチ片や土砂が付着している場合には除去しましょう。ま

た、取卸し時にも異物が混入しないよう心懸けて作業しましょう。

5 包を貯蔵する際には、農薬・肥料・燃料など、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵しましょう。また、虫害の被害を受けない為に、全包ビニール梱包を行いましょ。梱包の際は水分に気をつけて口を養生テープ等で閉じましょ。

(松元 貴光)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

「農薬危害防止運動」

◆ はじめに

県は、国と連携し、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理、環境への影響に配慮した農薬の使用等を推進する「農薬危害防止運動」を農薬を使用する機会が増える6月から8月にかけて実施しています。

◆ 「農薬危害防止」のためのポイント

1 農薬のラベルを良く確認してから使いましょう！

容器に登録番号（農林水産省登録第〇〇〇〇号）がある農薬を使用しましょう。ラベルに農薬登録番号がなく、農薬の効果を謳ったり、または病害虫の防除効果がある資材は、無登録農薬の疑いがあるので使用しないようにしましょう。

また、農薬を使用する際は、ラベルに表示されている使用基準や使用上の注意事項を必ず確認して、使用方法を守りましょう。

なお、農薬を使用したときは、必ず防除記録をつけましょう。

2 住宅地等の周辺で農薬を使用する時は事前周知を徹底しましょう！

住宅地等に近接する公園等の植物、街路樹等に農薬を散布する場合は、周囲の住民に対し事前に農薬使用の目的、実施日時、使用農薬の種類などを十分周知しましょう。

3 保管管理を徹底しましょう！

農薬は安全な場所に鍵をかけて保管するなど、保管管理を徹底しましょう。

4 空き容器等は適切に処理しましょう！

農薬の空き容器または使用期限が切れた農薬等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により、適切に行いましょう。

5 揮散する農薬は被覆が必要です！

クロルピクリン剤などの被覆を要する土壌くん蒸剤を使用するときは、使用上の注意事項を遵守し、防護マスクの着用や施用直後のビニール等での被覆を確実に行う等、安全対策を厳重に行いましょう。

6 散布時にはしっかり保護具を身につけましょう！

農薬の散布作業における事故を防止するため、農薬用マスク、保護めがねなどの防護装備を着用しましょう。

7 水田外への農薬流出を防止しましょう！

水田において農薬を使用するときは、止水期間の適切な水管理や畦畔整備等を行い、水田外への農薬の流出を防止しましょう。

8 防除器具は十分に洗浄しましょう！

農薬の使用前後には、防除器具を点検し、十分に洗浄されているか確認しましょう。

◆ おわりに

農薬使用者には、しっかりした農薬使用が求められています。この機会に、農薬の使用や管理方法をもう一度見直し、適正な農薬の使用を行いましょう。

(食の消費・安全推進室 環境保全農業担当)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬時点では、県内で葉いもちの発生は確認していません。早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稲	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	早期水稲の一部で発生の多いほ場が確認されているので、水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やたばこ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。次期作の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺状況ですが、多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。特に、ウメやナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	やや多 並 並	黒点病は、その感染源である枯れ枝の除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	並 — 並	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャホリガ ※ チャノミドリヒメヨコバイ ※ チャノキイロアザミウマ クワシカガラムシ	やや多 並 やや多 並 並 多 やや多 やや少	チャノミドリヒメヨコバイ・チャノキイロアザミウマの発生がやや多いため防除情報を発表しています。新芽生育期に加害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの発生が多くなっています。防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。
<p>1) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki です。</p>			